

SUBWAY[®]

BASS DI-PREAMP

取扱説明書



安全上の注意

- ・ この取扱説明書をよくお読み下さい。
- ・ この取扱説明書に従って下さい。
- ・ 本商品を水分の近くで使用しないで下さい。
- ・ 本商品を掃除するときは乾いた布のみを使用して下さい。
- ・ 本商品に対応した電源アダプターのみ使用して下さい。
- ・ 電源コード、特にプラグ部分は踏んだり無理に引っ張ったりしないで下さい。
- ・ 本商品は雷が鳴っているときや長い時間使用しないときは電源を接続しないようにして下さい。
- ・ 本商品に不具合が生じた場合は最寄りのMESA/BOOGIE取扱楽器店または修理業者に相談して下さい。
また液体やゴミが商品内部に入らないように注意して下さい。故障の原因となります。
- ・ 照明の近くで本商品を使用したり保管しないで下さい。
- ・ **警告**：火事や電気ショックの危険を避けるため、本商品を雨や水分にさらさないようにご注意下さい。
- ・ スピーカーや再生機器を損傷しないように、本商品と他の機材と接続する際は電源を切っておいて下さい。
- ・ 今後も参照して頂けるようにこの取扱説明書を保管しておいて下さい。
- ・ 本商品のボタンやスイッチ、コントロールを操作する際は力を入れすぎないようにして下さい。また本商品を掃除する際はベンジンやシンナー等は使用しないで下さい。
- ・ 本商品のリアパネルに記載されている仕様を持つ電源アダプターのみを接続して下さい。また本商品を使用する地域で正しいアース接続が行われるようご注意下さい。誤った接続やアース接続による故障は保障の対象外となります。

概要

この度は、SUBWAY® BASS DI-PREAMP をお買い求めいただきありがとうございます。そしてメサ/ブギー・ファミリーへようこそ！まず最初に、お使いのアンプにメサ/ブギーをお選びいただきありがとうございます。私達は、あなたの音楽制作の手助けが出来ることを心から嬉しく思います。我々が目指しているのは、少しでもあなたの作品が良いものになるように、いつでも力になれる準備をしておくことなのです！私達は、この新しいBASS DI-PREAMPが、これから永きに渡り、あなたの信頼を獲得し、あなたの音楽を自由に表現するための良きパートナーとなれることを確信しています。

あなたが選んだBASS DI-PREAMPは、いくつもの優れたアンプが生み出された中でも、大いなる遺産となるトーンの本質とも呼ぶべきモデルです。その元祖はMESAがこれまで開発した中で1番最初の"MESA 450 Bass Head"に遡ります。実際、メサの最初の5種類のベースアンプはラグニタス山の掘って小屋で作られました(ギターアンプについての圧倒的評判によって見劣りするちょっとした知識ではありませんが)。しかし我々はいつもベースアンプに愛情を注ぎ、そして当初から、我々の表現で素晴らしい商品を発表出来るように取り組んできました。MESAのベースアンプの血脈は、1980年、最初のラックマウントシャーシのベースアンプである"D-180"から引き継がれています。80年代中盤には"BASS 400"が登場し、1988年後半に、6L6管を6管加えてトータル12管をパワーセクションに持った、素晴らしいピッチとパンチ、そしてパワーを兼ね備えた"BASS 400+"が登場します。

"400+"は20年に渡って世界中の最も才能のあるベーシスト達によってクラシックとなりました。ポール・マッカートニー、マーク・キング、スタンリー・クラーク、ジャック・ブレイズ、マイケル・アンソニー、プラスコそしてブーツィー・コリンズといった面々、そして他にも国際的なスター達が"400+"をセンターステージに設置し、20年といった周期の中でバンドを支えているのです。これらの象徴的なアンプは中古市場を見れば今なお高値で取引がされています。

複数のプロ仕様を柔軟かつコンパクトなリアアンプに求めるトーン・フリークに朗報です！ SUBWAY BASS DI-PREAMPは、MESAのベースアンプの血脈を受け継ぐ次のステップとなるものです。SUBWAY PREAMPの回路は完璧なトーンバランスをそれ自体で確立しており、全てのプレイヤーとスタイルに機能的に対応しています。その回路は持ち運びやすいサイズにパッケージされ、スタジオ品質のD.I.フォーマットは革新的かつ完全な機能を持ち、あなたが想像する全ての局面、例えば練習やギグ、スタジオでの使用に実用的に対処します。よく考えられた入出力端子やレイアウトは、SUBWAY DI-PREをスイス・アーミーのナイフのように機能的に、どのような使用方法でもワールドクラスのベーストーンを生み出すのです。SUBWAY® BASS DI-PREAMPは、アメリカはカリフォルニア州のベタルマでハンドメイドにて生産されています。

フロントパネル(コントロールと機能)



INSTRUMENT INPUT(楽器用インプット)ジャック シャーシ右側に位置するこのジャックに楽器(ベース)の出力を接続します。(本機のモノリシック・J-FETバッファアンプの初段に信号が送られます)。バッファアンプの入力感度は、ACTIVE/PASSIVEスイッチで調整可能で、ACTIVEポジションでは、PASSIVEポジションよりも約10dBほど感度が低く(ゲインが低く)なります。1/4"(6.3mm)プラグがジャックに接続されているときは電源が自動的にONになりますが、1/4"(6.3mm)プラグはTIP-SLEEVEタイプ対応で、TIP-RING-SLEEVEタイプだと回路が正しく動作しませんのでご注意ください。なお、エンジニアにDI-PREがONなのかOFFなのか伝えておくと余分なポップノイズや予期せぬ信号がシステムに送信されるのを防ぐことができます。

THRU OUTPUT(スルー・アウトプット)ジャック シャーシの左側に位置するこのジャックは楽器のスルーアウトプットで、インプットジャックの信号とバラレルになります。ここからの信号は(独立していない)ベースからの直の信号になります。バッファアウトからのものではないため、よくある使い方としてはステージ上のアンプのインプットに接続されます。

DEEP(ディープ)スイッチ このスイッチはDEEP(ディープ)フィルターが作動させ、クラシックといえる低域のレスポンスとブーストが行われます。フィルターが作動すると、超低域が若干ブーストされ、ハイパスフィルターがかかる周波数帯が下がります。このコンビネーションの効果として、ボトムエンドのレスポンスがより丸く分厚くなります。小さな(コンパクトなスタイルの)スピーカーキャビネットを併せて使用する場合は、音量設定が高すぎることによってダメージを受ける恐れがありますのでご注意ください。

ACTIVE/PASSIVE(アクティブ/パッシブ)スイッチ このスイッチでJ-FETインプットバッファの感度を設定することが出来ます。大抵の場合(いつもではないですが)、アクティブのベースはよくあるパッシブタイプのベースよりも10dBほど信号レベルが高くなっています。ローエンド付近でゲインをコントロールするときは、このスイッチを上側(ACTIVE側)に設定すると、入力感度が10dBほど下がり、高出力のアクティブベースを使用する際もオーバーロードなく音色調整が出来ます。

HIGH PASS FILTER(ハイパスフィルター) 外観上スイッチやコントロールがあるわけではありませんが、重要な内部機能で、特にアンプがハイ・ドライブ状態において超ローエンドをコントロールします。この精密な4極フィルターはターンオーバーフリーケンシーを持ち、約30Hzにおいては最大限フラットとなり帯域の波はありません。HPF(ハイパスフィルター)がプロオーディオの業界において数十年に渡って標準である一方、この機能はここ数年、ベースアンプで見られるのみとなっています(例外的に数台の目立つもののみ)。またこのフィルターは機械的な保護機能の意味合いを持ち、スピーカーキャビネットがドライバーに対して十分な音響抵抗がない音域以下のパワーを制限することも出来ます。これは、特にコンパクトなスピーカーキャビネットと併用する場合に、スピーカーの寿命を縮めてしまう基本的(かつ避けなければならない)理由の1つです。

INPUT(GAIN) (インプット(ゲイン))コントロール INPUTコントロールは、最初のゲインステージの入力ゲインを設定するもので、以降のエレクトロニクス・ステージはこの設定に追従します。入力ゲインをオーバードライブすると、あなたの演奏スタイルに合ったトーンキャラクターが得られるかもしれません。かなりオーバードライブさせているときは、TREBLEのEQの設定を少し下げてサウンドのとげとげしさを減らしたり、BASSのEQを下げてサウンドにより輪郭とインパクトを与えたりすると良いでしょう。

VOICING(ボイシング)コントロール このアクティブのEQコントロールは、アンプのレスポンスをよりフラットなカーブ(反時計回り方向)からよりヴィンテージなカーブ(時計回り方向)に変化させることができます。それは、ノブをただ回すだけで全周波数帯のレスポンスを変えることが出来るのです。コントロールを時計回りに回すと、ローエンドとハイエンドがブーストされ、ミッドレンジ(中域)がカットされます。このよりヴィンテージなポジションは、一般的にオールドスクールなファンクやスラップトーン、また丸いボトムと少し迫力を加えたロックのトーンに使用されます。このパワフルな機能の可能性を追求するために、色々実験してみることが重要となります。最初に音色の設定を行なう際は、VOICINGコントロールをヴィンテージな方向に向かって時計回りにゆっくり回し、探しているアンプのボイシングが得られたらそこでストップします。時計回りに回せば回すほど、ローエンドがブーストされ、ミドルはカットされ(周波数もまた変化します)、マイルドにトレブルのブーストがされます。VOICINGコントロールによって基本となるトーンがラフに作られたら、EQ(ベース、ローミッド、ハイミッド、トレブル)でより細かなトーンシェイプを行います。

BASS(ベース)コントロール このアクティブEQコントロールは信号内の低域の量を調整するコントロールで、残りの領域とは相対的になります。低域(80Hz以下)は、トーンのボトム、丸みそしてフィーリングを担っています。このアクティブコントロールによってブーストとカットを行うのですが、ブーストの量は、フラット位置(12時位置)から時計回りにどれだけ回すかに比例し、カットの量はフラット位置から反時計回りにどれだけ回すかに比例します。ことEQに関しては、一般的に、少しの調整が大きくサウンドを変化させます。必要な分だけ動かしたら、あとは何もしないようにします。もしともコンパクトなスピーカーキャビネットで大音量が必要な場合は、ベースをよりブーストさせることでスピーカーをオーバードライブさせることが可能です。もしそれでもローエンドが十分でない場合は、単に必要な機材が足りないだけですので、スピーカーを増やして下さい。なお、このコントロールはシェルビングタイプのフィルターです。

LOW MID(ローミッド=低中域)コントロール このアクティブのEQコントロールは信号内の低中域(ローミッド)の量を調整するコントロールで、残りの領域とは相対的になります。低中域(センター周波数が200Hz)は、"アーシー"または"ウッディー"なトーンキャラクターを担っています。このアクティブコントロールによってブーストとカットを行うのですが、ブーストの量は、フラット位置(12時位置)から時計回りにどれだけ回すかに比例し、カットの量はフラット位置から反時計回りにどれだけ回すかに比例します。なお、このコントロールはピーク・ディップ(またはベル)スタイルのフィルターです。

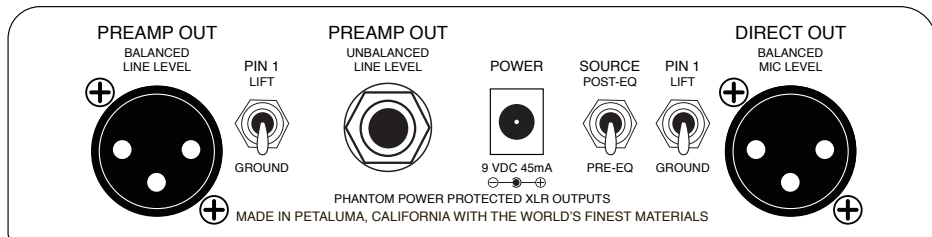
HIGH MID(ハイミッド=高中域)コントロール このアクティブのEQコントロールは、信号内の高中域(ハイミッド)の量を調整するコントロールで、残りの領域とは相対的になります。高中域(センター周波数が480Hz)は、筆ったようなトーンキャラクターを担っています。このアクティブコントロールによってブーストとカットを行うのですが、ブーストの量は、フラット位置(12時位置)から時計回りにどれだけ回すかに比例し、カットの量はフラット位置から反時計回りにどれだけ回すかに比例します。なお、このコントロールはピーク・ディップ(またはベル)スタイルのフィルターです。

TREBLE(トレブル)コントロール このアクティブのEQコントロールは、信号内の高域(トレブル)の量を調整するコントロールで、残りの領域とは相対的になります。高域(2.5kHz以上)は、ブライトでキラキラしたトーンキャラクターを担っています。このアクティブコントロールによってブーストとカットを行うのですが、ブーストの量は、フラット位置(12時位置)から時計回りにどれだけ回すかに比例し、カットの量はフラット位置から反時計回りにどれだけ回すかに比例します。なお、このコントロールはシェルビングスタイルのフィルターです。

MASTER(マスター)ボリュームコントロール MASTERコントロールは、PREAMP OUTに送られる信号レベルを設定し、SUBWAY BASS DI-PREAMPの演奏ボリュームを決定します。またINPUT GAINコントロールと併用して、最適な演奏ボリュームを設定します。例えば、オーバードライブしたトーンを得るために入力ゲインを高めを設定する場合は、適正な演奏ボリュームを得るためとパワーアンプがオーバードライブし過ぎるのを防ぐためにMASTERボリュームを低めに調整する必要があるでしょう。同じように、もし非常にクリーンなサウンドを求めている場合は、INPUT GAINコントロールを最小値にして、MASTERボリュームコントロールを高めを設定すれば、必要な演奏ボリュームが得られます。

POWER LED(パワーLED) この青色のLEDが点灯しているときは、DI-PREAMPに電源が供給され、正常に動作していることを示します。もしLEDが点灯していないときは、電源元と、電源ケーブルがリアパネルのコネクタに正しく接続されているかの両方をダブルチェックして下さい。

リアパネル(コントロールと機能)



電源ジャック SUBWAY BASS DI-PREAMPは、プラグ部分が標準の2.1mmセンターピン/5.5mmパレルタイプの、標準の9VDCセンターマイナスの電源アダプターで駆動するように設計されています。DI-PREAMP自体に外部パワーサプライからのノイズ耐性がありますが、SUBWAY DI-PREAMPの前後に接続されるエフェクトペダルや機器によってグラウンド・ループノイズが発生することがあります。ノイズが発生したときは、まず最初にDI-PREAMPに電源を供給し、次にノイズの原因でないペダルを1台ずつ追加していきます。

駆動電源について SUBWAY BASS DI-PREAMPは、9V電池(アルカリ推奨)またはプラグ部分が標準の2.1mmセンターピン/5.5mmパレルタイプの、標準の9VDCセンターマイナスの電源アダプターで駆動するように設計されています。外部電源アダプターが接続されているときは自動的にアダプターでの駆動となりますが、内部電池は有効な状態に保たれます(ACアダプターでの電源供給がされない場合は自動的に電池駆動に切り替わります)。電池は本機の底面にあるバッテリーボックスのカバーを外して装着します。内部回路は電池に問題があったり極性が反転した電源アダプターが接続された場合でも、保護されるように設計されています。DI-PREAMPに必要な電流は10mA以下ですので、およそ40時間の電池寿命を可能にしています(使用条件によります)。

PREAMP OUT(プリアンプアウト) XLRジャック このジャックはバランス端子となっており、MASTERボリュームを高めの設定にすると(ラインレベルで)+4dBu、アウトプットレベルが最大で+12dBuとなります。またこのジャックは、どんなプロレベルのパワードスピーカー、モニターやパワードPAにも接続出来る汎用性を持ち、他にもプロユースのオーディオ・パワーアンプ(クロスオーバー付またはそうでないもの含む)、外部クロスオーバーやDSPクロスオーバー対応のパワーアンプにも接続出来ます。またXLRバランスジャックは、多くのベーシストが機材に組み込むクラシックでお

気に入りのコンプレッサーのバランス入力との接続にも適しています。THRU OUTや1/4"PREAMP OUT、DIRECT OUTと併用して、SUBWAY DI-PREAMPを究極のスイス - アーミーのナイフのような機能的な機材またはバックアップ機材として、各ライブ会場で見られるようなステージモニターや、パワーアンプやキャビネットそしてPAシステムを使って慣れ親しんだトーンが得られるのです。また多様な機材との接続が可能ですので、異なるプリアンプやパワーアンプそしてスピーカーキャビネット同士でトーンをブレンドし、パイアンプやマルチアンプ/キャビのようなより高度な使用方法も可能にする価値のあるものです。DIRECT OUTと同時に使用すれば、SUBWAY DIはマルチ - インプット・レコーディング機器として使用でき、両アウトプットにあるGROUND LIFTスイッチとPRE/POST両方に切り替えられるスイッチとの併用で、スタジオ品質のアウトプット信号を供給出来るのです。注意：PREやPOSTの信号ソースを複数レコーディングする際は、PRE信号やPOST信号が多様なトーンコントロールによってフェーズ(位相)が変化することがあるので、常にチェック/モニターしておく必要があります。なお、ここからの信号は、MASTERボリュームコントロール、また全てのボイシングやEQフィルター通過後の信号が抽出されています。また、ファンタムパワーを持つインプット信号からの予期せぬ接続に備えて、ファンタムパワー保護が完全に行われています。

PREAMP OUT GROUND LIFT(グラウンドリフト)スイッチ このスイッチで、XLR PREAMP OUTコネクタの1番ピンから、サーキットのグラウンド/アースを切り離します。バランスアウトは、1番ピンやアンプに信号を送る際のシールド接続には影響されません。1番ピンが常にアンプのグラウンドバスに繋がっていても、しばしば(建物のアース環境によって違いますが)電流は通常の接続状態でグラウンド内で浮遊するためハムノイズを発生させます。(プリアンプの)センドの最後でグラウンドをリフトさせることにより、グラウンドの浮遊電流が信号にハムノイズを誘導しようとしても、シールド状態を保ちます。一つ、これを複雑にするのが大変高い(ラジオ)周波数で、グラウンドが本当にグラウンドしているわけではないため、このネットワーク内に追加のテクニックが必要で、同じネットワーク内に2つの機能的なグラウンドのスペクトルを持って追加のRFI(ラジオ・フリークエンシー・インターフェース)の範囲を与えるのです。一般的なルールとしては1番ピンをリフトして、もしノイズが出ればこれを試して下さい。また注意しておかなければいけないのはノイズには他の様々な原因があるということですが、このスイッチの切り替えによって、プリアンプとパワーアンプの間に発生するグラウンドループ(ノイズ)は多くの場合解決されるでしょう。

PREAMP OUT(プリアンプアウト) 1/4" (6.3mm)ジャック このジャックはアンバランス端子となっており、MASTERボリュームを高めの設定にすると(ラインレベルで)+4dBu、アウトプットレベルが最大で+6dBuとなります。またこのアンバランスのPOSTトーンコントロール・アウトプットは、楽器用アンプの"POWER AMP IN"やエフェクトループのRETURNジャックに(アンプのプリアンプとEQをバイパスして)接続するのに最適で、また楽器用アンプのインプットに接続するのにも適しています。その他、XLR PREAMP OUTや1/4"THRU OUTと併用することにより、SUBWAY DI-PREAMPをマルチ - アンプやパイアンプのセッティングにおける、追加アンプ/パワーアンプ/キャビネットの"トータル・コマンド・センター"として使用することも出来ます。このアウトプットはファンタムパワー保護がされていますが、異なるのは、業界標準を脅かす1/4"(6.3mm)インプットでファンタムパワー保護されているという点です。

DIRECT OUT(ダイレクトアウト)XLRジャック このジャックはアンバランス端子となっており、MASTERボリュームを高めの設定にすると(ラインレベルで)-30dBu、アウトプットレベルが最大で-10dBuとなります。このスタジオクオリティのDIRECT OUTは細心の注意を払って開発されており、最大限のローノイズ設計と、コンパクトなD-800の、名高くプレイヤー達の信頼を得たトーンをSUBWAY PREAMPIにもたらししています。もう何年

にも渡って、ベアシスト達は自分のD.I.のサウンドが素晴らしくてノイズも少ないとライブハウスやスタジオのエンジニアたちに勧めても顔をしかめられるといった状況がある中で、SUBWAY BASS DI-PREAMPのDIRECT OUTを使えば、あなたは自信を持ってそのD.I.を勧めることが出来、また初めてエンジニア達が笑みを浮かべながらD.I.のサウンドの音量を上げてミキシングするのを目の当たりにすることでしょう。お気に入りまたは新しいエンジニアに"SUBWAY D.I.チャレンジ"を促して、どれぐらいあなたが"このD.I.は今までの中で最高だよ。"と耳にしたかを知ってもらって下さい。なお、ファンタムパワーを持つインプット信号からの予期せぬ接続に備えて、ファンタムパワー保護が完全に施されています。

DIRECT OUT(ダイレクトアウト) グラウンドリフトスイッチ このスイッチで、XLR DIRECT OUTコネクタの1番ピンから、サーキットのグラウンド/アースを切り離します。バランスアウトは、1番ピンや、コンソールに信号を送る際のシールド接続には影響されません。1番ピンが常にコンソールのマスター・グラウンドバスに繋がっていても、しばしば(建物のアース環境によって異なりますが)電流は通常の接続状態でグラウンド内で浮遊するためハムノイズを発生させます。(ベースアンプの)センドの最後でグラウンドをリフトさせることにより、グラウンドの浮遊電流が信号にハムノイズを誘導しようとしても、シールド状態を保ちます。1つ、これを複雑にするのが大変高い(ラジオ)周波数で、グラウンドが本当にグラウンドしているわけではないため、このネットワーク内に追加のテクニックが必要で、同じネットワーク内に2つの機能的なグラウンドのスペクトルを持って追加のRFI(ラジオ・フリークエンシー・インターフェース)の範囲を与えるのです。一般的なルールとしては1番ピンをリフトして、もしノイズが出ればこれを試して下さい。また注意しておかなければいけないのはノイズには他の様々な原因があるということですが、このスイッチの切り替えによって、プリアンプとコンソールの間で発生するグラウンドループ(ノイズ)は多くの場合解決されるでしょう。

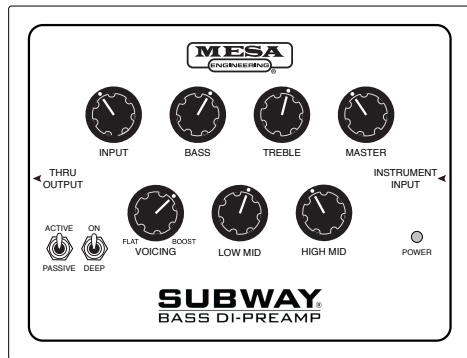
DI OUT SOURCE (ソース) スイッチ このスイッチでDIRECT OUTの信号を送る際の信号の発生するルートを選択します。PREの位置では、信号はインプット・バッファー(PREゲインコントロール)から直接出され、ACTIVE/PASSIVEスイッチはDI OUTPUTに送るための信号レベルがより適合するように動作ゲインを調節します。このスイッチをPOST位置にすると、信号は4バンドEQのアウト、そしてマスターボリュームの前から出ます。通常PA用には、ハウスエンジニアはプリEQのセンド信号を好みますが、理由はエンジニアのPAシステムはステージ上の機材とは異なり、ステージ上では良いサウンドのEQのセッティングになっても、より大きなシステムやステージより広い空間だと上手くいかない場合があります。ハウスエンジニア達にD.I.を使うように勧める際は、PREの位置に設定していることを教えてあげると良いでしょう(彼らはそのスタジオクオリティやローノイズなところを大変気に入るはずです)。またモニターと会場のミックスの両方で、ライブのサウンドが素晴らしいものになります! レコーディングでは、エンジニアの目指すサウンドにも依りますが、PREでもPOSTでもどちらでも使えます。または、前述した通り両方の信号を捕まえて、ブレンドまたはアンプにマイキングするなどして独立させ、SUBWAY BASS DI-PREAMPに信号供給させることも出来ます。まさにスイス・アーミーのナイフのような、機能的な接続とトーンを持っています!

サンプルセッティング

FUNK/FINGERSTYLE



CLASSIC SLAP



SUBWAY® BASS DI-PREAMP Specifications

Output Levels:	Nominal	Maximum	(nominal)
Preamp Output (XLR balanced):	+4dBu	+12dBu	(line)
Preamp Output (1/4" unbalanced):	0dBu	+6dBu	(line)
DIRECT Output (XLR balanced):	-30dBu	-10dBu	(mic)
Signal to Noise Ratio:	-78dB (20-20kHz, unweighted, battery operation)		
Maximum Available Gain:	~45dB, (eq controls flat, passive mode, XLR preamp output))		
High Pass Filter:	~30Hz, 4 pole, modified Butterworth alignment		
Equalization:	Bass:	+14dB/-14dB @ 40Hz [note 1]	
	Low Mid:	+14dB/-14dB @ 200Hz	
	High Mid:	+14dB/-14dB @ 480Hz	
	Treble:	+11dB/-14dB @ 4kHz [note 1]	
Power Requirements:	9 V alkaline battery or 9 VDC external power supply (2.1mm, center negative)		
Current draw:	~10mA average		
Battery Life:	~40 hours average		
Size:	6.875" (175mm) wide x 5.27" (134mm) deep x 2.51" (64mm) high [note 2]		
Weight:	Approx. 1.26 lbs (0.57 kg) [note 3]		

[note 1]: measured approx. 1 octave from knee

[note 2]: including feet and controls

[note 3]: not including battery

商品改良のため、仕様や外観は予告なく変更されることがあります。



ギブソン・ブランス・ジャパン株式会社

Email: service.japan@gibson.com

「@gibson.com」からのメールを受信できるよう設定をお願いいたします

お電話でのお問い合わせ窓口：0120-189433（通話料無料）

受付時間 9:30 - 17:00（土、日、祝日、年末年始を除く）